

博士論文審査要旨

申請者： 杉本 香織（文京学院短期大学 助教）

論文題目：ヘミングウェイの死後出版作品研究 編纂方法とその問題点

（Hemingway's Posthumous Works: Different Editing Methods and How They Deviate from His Original Manuscripts）

申請学位： 博士（学術）

審査員：

主査	早稲田大学教育・総合科学学術院 教授	小林富久子
副査	東京女子大学現代教養学部 教授	今村 楯夫
副査	早稲田大学教育・総合科学学術院 教授	寺沢みづほ
副査	早稲田大学国際教養学術院 教授	
	Ph.D. (State University of New York, Buffalo)	麻生 享志
副査	早稲田大学教育・総合科学学術院 准教授	
	Ph.D. (University of Texas at Austin)	石原 剛

I. 本論文の目的

本論文は、アメリカ人作家アーネスト・ヘミングウェイ（1899-1961）の死後出版作品を研究対象とし、出版本とそのオリジナル原稿の比較検証を通じて「ヘミングウェイ」をめぐる以下の二つの問題を考察することを目的とする。1つ目は、第三者による編纂の方法とその問題点を指摘し、彼らが「編纂」を通じて作り上げようとした「ヘミングウェイ」像を明確にした上で、それとヘミングウェイ自身がオリジナル原稿で構築・投影・発信しようとしていた自己像とがいかに乖離しているかを論証することである。2つ目は、事実と虚構、フィクションとノンフィクションの境界を融解しようとした後年・晩年のヘミングウェイが、死後出版作品群の執筆を通じてどのような「独自の自伝スタイル」を構築しようとしたか、そのメタフィクション的特徴に迫ることである。

II. 本論文の構成

本論文は四部構成で、序章および付章を含めて計9章（総計302ページ）から成る。論文の目次は、以下の通りである。

論文目次

略記

年表

第一部 先行研究

第1章 はじめに.....	2
第2章 マニョスクリプト研究の動向	
2.1 生成批評論的アプローチとは マニョスクリプト研究から生成批評へ.....	15
2.2 ヘミングウェイ作品におけるマニョスクリプト研究.....	19
2.2.1 生前出版作品	
2.2.2 死後出版作品 / 遺作研究 『エデンの園』を中心に	

第二部 伝記をめぐる「ヘミングウェイ」構築の軌跡

第3章 ヘミングウェイと1930年代以降	
3.1 1930年代 「パパ・ヘミングウェイ」の発信とメディア.....	74
3.2 1940年代 「ヘミングウェイ伝説」or「偽りのタフガイ神話」?	84
3.3 1950年代 乖離するヘミングウェイの自己イメージと 「パブリック・イメージ」.....	92
3.4 1960年代 “crack-up” と進まぬ筆.....	104

第三部 死後出版作品における編纂方法とその問題点

第4章 <i>Islands in the Stream</i>	
4.1 執筆経緯とその世界.....	113
4.1.1 編纂本vs.オリジナル原稿	
4.1.2 Early Manuscriptの“Miami”セクション	
4.2 <i>Islands in the Stream</i> の“Bimini”セクションにおけるAuto/Biography 創造への試み Charles Scribner, Jr.らによる編纂の問題点.....	121
第5章 <i>The Garden of Eden</i>	
5.1 執筆経緯とその世界.....	133
5.1.1 編纂本vs.オリジナル原稿	
5.1.2 Provisional Ending	
5.2 ヘミングウェイの「デイヴィッド」、ジェンクスの「デイヴィッド」 <i>The Garden of Eden</i> における編纂方法とその問題点.....	142
5.3 晩年の「ニック」 <i>The Garden of Eden</i> と“The Last Good Country”を つなぐmiscegenalな憧憬.....	154
第6章 <i>A Moveable Feast</i>	
6.1 執筆経緯とその世界.....	167
6.1.1 編纂本vs.オリジナル原稿	
6.1.2 Unpublished Sections	
6.2 「失われた」 <i>A Moveable Feast</i> Mary Hemingwayの編纂方法と その問題点.....	179

第四部 死後に再編纂・再出版された作品における編纂方法とその問題点	
第7章 <i>True at First Light</i>	
7.1 執筆経緯とその世界.....	191
7.2 「パパ／父」ヘミングウェイを創造する Patrick Hemingway の 編纂方法とその問題点.....	195
7.3 浮遊する「ヘミングウェイ」 <i>True at First Light</i> のオリジナル原稿 における記憶の操作と自己の再構築.....	209
第8章 <i>The Dangerous Summer</i>	
8.1 執筆経緯とその世界.....	220
8.2 “Ernest”か“A worrier”か? <i>The Dangerous Summer</i> の オリジナル原稿における自己分裂と“Ernest”の消滅.....	223
おわりに.....	242
付章 Auto/Biographyとしての <i>For Whom the Bell Tolls</i>	244
Appendixes	
「ヘミングウェイ・コレクション」原稿カタログ.....	259
References.....	290

III. 各章の概要

第一部 先行研究

第1章 はじめに

本章では、ヘミングウェイの死後出版作品研究の背景、目的、方法論を、ヘミングウェイの執筆スタイルの変化、国内外における死後出版作品研究の実情およびその問題点の提起を通じて明らかにしている。

ヘミングウェイは生涯、自身の姿を作品に投影させた作家であった。その手法は、「ニック・アダムズ物語」に代表される初期（1920年代～30年代）の作品群においては単層的で、マッチョで「パパ」としての自己イメージを、特に躊躇することなく主人公に付与するというものが主であった。ところが1940年代半ば以降、ヘミングウェイの自身を投影させる手法が徐々に複層的なものへと変化していった。作中における事実と虚構、フィクションとノンフィクションの境界が融解し、「自伝的小説」や「虚構的回想録」と形容される作品が主流を占めるようになったのである。また、いったん筆を執ったものの、途中で執筆を断念する作品が増えてきたのも同じ頃である。この背景には、もはや1930年代までのように、執筆当時の自己イメージをそのまま投影・発信する訳にはいかなかった、後年・晩年のヘミングウェイの焦燥感や苦悩が見え隠れする。

未完のまま遺されたヘミングウェイの原稿は、死後、遺族らによる編纂を経て断続的に世に送り出された。このいわゆる死後出版作品群が、従来のヘミングウェイ文学研究に新たな一石を投じたことは言うまでもない。男女の性役割の交換や同性愛を描いた『エデンの園』が、ヘ

ミングウェイ(作品)におけるセクシュアリティ研究の必要性を促す大きな契機となったことはよく知られている。しかし、後年のヘミングウェイがいかに自身を作品に塗り込んでいったかという点に関していえば、死後出版作品群はその苦悩と挫折の軌跡をたどる機会を提供していない。それどころか、その軌跡の追跡を拒むかのように、さらなる隠蔽に加担している。ヘミングウェイが実像と異なる「ヘミングウェイ」像を構築しようとした操作に、編纂者が「編纂」という操作の上塗りをしているからである。つまり死後出版作品群における作家ヘミングウェイと「ヘミングウェイ」像の関係性を明らかにするには、まず編纂者による操作方法を分析してその上塗りを剥がし、ヘミングウェイが生前中断した時点の草稿(オリジナル原稿)を復元した上で、彼自身が行った操作を検証していく必要がある。

ヘミングウェイ作品における初期のマニュスクリプト研究は、出版本とオリジナル原稿の語法的な比較に執心し、その差異を指摘するに止まっていた。出版本だけでなくオリジナル原稿をも「完成品」を見なしたが故に、オリジナル原稿に手を入れた編纂者の変更をすべて過失・無用と結論づけたのだ。日本におけるマニュスクリプト研究も、西尾巖が『エデンの園』のオリジナル原稿調査に従事、出版本との相違点を『ヘミングウェイと同時代作家 作品論を中心に』(1999)で公にしたが、やはり双方の差異を指摘することに大きな比重を置いている。

1990年代半ばに入ると、ナンシー・R・カムリー&ロバート・スコールズらが、テキスト間の差異の指摘を越え、マニュスクリプト研究の新たな可能性を提示していった。しかしカムリー&スコールズやデブラ・モデルモグに代表されるように、これまでのマニュスクリプト研究/生成批評は、ヘミングウェイのジェンダーおよびセクシュアリティの解明に大きな比重が置かれており、ヘミングウェイが未完の遺稿でいかに自身を構築・投影しようとしたか、またその痕跡が編纂によっていかに損なわれてきたかは、国内外問わず、殆ど論じられてこなかった。

本研究では、まず、ヘミングウェイのオリジナル原稿を所蔵しているJFK図書館内「ヘミングウェイ・コレクション」で実施した原稿調査の結果を基に、オリジナル原稿の復元を試みている。そして各編纂者の編纂方法とその問題点を明らかにすることによって、彼らが出版本にいかなる「ヘミングウェイ」像を付与させようとしたかを浮き彫りにする。また、後年・晩年のヘミングウェイが成し得ようとした「独自の自伝スタイル」の様相および失敗のプロセスを、オリジナル原稿の修正痕などから考察する。これまで全容が公にされることがほとんどなかった死後出版作品を研究対象とし、オリジナル原稿の全体像を提示にした上で、作者と編纂者がそれぞれ別次元で行ったテキスト操作、「ヘミングウェイ」像の操作の解明に迫る。

第2章 マニュスクリプト研究の動向

本章では、マニュスクリプト研究/生成批評の歴史を略述した後、これらの論がヘミングウェイの生前出版作品群および死後出版作品群においてどのように展開されてきたかを総括している。

まず生前出版作品については、以下の4つに分類している。

主に創生期(1970年代後半から80年代中盤)に精力的に行われた研究方法

- (a) ヘミングウェイが原稿に遺したメモなどを頼りに、それまで多義的に解釈されていた作品に一石を投じようとする方法

(b) 創作段階における複数の原稿の相違点を指摘する方法

1980年代後半以降に盛んになった研究方法

(c) オリジナル原稿に見られる人称の揺らぎや時制の変更を指摘する方法

(d) revisionの過程を検証し、作品にまつわる伝記的事実に疑問を投げかける方法

特に(c)と(d)では、より微視的な視点で出版本と原稿を比較したり、比較から得たものを従来のヘミングウェイ研究の成果と照らし合わせるという点において、(a)(b)よりも複層的である。

一方、死後出版作品群については『エデンの園』を中心に、マニュスクリプト研究／生成批評の変遷を辿っている。『エデンの園』の先行研究が他の死後出版作品のそれと大きく異なる点として、前者はオリジナル原稿と出版本の差異の指摘にとどまらないことが挙げられる。カットされた場面を出版本に組み入れることによって、ジェンダーやセクシュアリティに対するヘミングウェイの欲望を浮き彫りにしようとする試みが活発になされている。

第二部 伝記をめぐる「ヘミングウェイ」構築の軌跡

第3章 ヘミングウェイと1930年代以降

本章では、マッチョな「ヘミングウェイ」という公的イメージが定着しつつあった1930年代以降の彼の人生と作品を、「ヘミングウェイ」像構築の軌跡とその変容を軸に概観している。

1930年代のヘミングウェイは、『午後の死』などへの度重なる酷評に対抗するかのように、『エスカイア』等の男性雑誌を通して釣りや狩りに興じる「タフガイ」や「パパ・ヘミングウェイ」のイメージを強力に発信しようとした。またヘミングウェイ文学において「空洞の10年間」とも言うべき1940年代は、上記のイメージを思うように発信できないことへの苛立ちか、あるいはこの頃に現れた鬱の徴候が原因かどうかは定かでないが、しばしば自我誇大症ととれる言動が目立つようになる。虚像としての自身の姿を意識的に打ちだそうとする態度が顕になり、以前にも増して「パパ」役を演じることを嬉しがるようになった。

次いで1950年代には、40年代に積極的に発信した自己イメージが妥当でなかったことを自覚、創作活動を通じてあらたに自分を発信する方法を模索しようとした。しかし世間では依然として「パパ・ヘミングウェイ」のイメージが根強く、互いに相容れない二つの「ヘミングウェイ」像の間で打開点を見いだせないまま、アフリカでのサファリ体験を綴った『夜明けの真実』やパリ時代の回想録『移動祝祭日』の執筆を途中で断念してしまう。そして1960年、スペイン闘牛ツアーをまとめた『危険な夏』の執筆を開始するも、心身ともに大きく調子を崩し、翌年7月に銃で自らの命を絶ったのである。

第三部 死後出版作品における編纂方法とその問題点

第4章以降は、死後出版作品を「ヘミングウェイの死後、初めて公開された遺作」(第三部、6章まで)と「雑誌に部分掲載されていたものの、後に再編纂されて出版された作品」(第四部、7章と8章)に二分し、それぞれを執筆順に論じている。いずれの章も、前半ではこれまで全容が明らかになってこなかったオリジナル原稿の作品世界を紹介する文献学的考察に力点を置いている。そして後半では、それが第三者の編纂でいかに損なわれたか、ヘミングウェイが到達しようとした「独自の自伝スタイル」がどのようなものであったかを考察している。

第4章 『海流の中の島々』(*Islands in the Stream*, 1970)

本章では、『海流の中の島々』の第一部「ビミニ」を研究対象にし、未亡人メアリーと出版元のチャールズ・スクリプナー・Jr. による編纂の方法とその問題点を明らかにしている。従来の「ビミニ」研究と大きく異なる点は、ヘミングウェイが遺した二種類のオリジナル原稿

“Early Pencil Manuscript”(EM)と“Bimini Rewrite Manuscript”(OM)の両方を調査し、考察に組み入れていることである。これにより、後者の原稿(OM)しか編纂対象としなかったメアリーたちの判断がいかに誤ったものであったか、結果的にヘミングウェイの「ビミニ」創作の意図がいかに損なわれたかを論じている。

本章では、メアリーたちが「ビミニ」編纂時にポイントとした中で、特にOMのもつ特色を半減させた点として、以下の4つを指摘している。

登場人物の名前の揺らぎを解消させたこと

OMでは一人称と三人称で語られていた主人公ハドソンを三人称で統一したこと

OM11章(次男デイヴィッドがマカジキと死闘を繰り広げた翌朝の場面)をすべてカットしたこと

OM16章と17章(ハドソンが次男デイヴィッドと三男アンドルーの事故死の知らせを受けた後のシーン)を大幅にカットしたこと

特にとにみられる名前や人称の揺らぎに関しては、編纂者だけでなく研究者の間でも、長らくヘミングウェイの単純なミスと判断されてきた。しかし申請者は、同様の揺らぎが見られるもうひとつのオリジナル原稿、EMの検証を通じて、名前の変更と人称の揺らぎはヘミングウェイの新たな自伝スタイルの創造への希求と試行錯誤、そして失敗の形跡であると解釈する。その根拠として、申請者はEMの特徴を以下のように挙げている。

- (a) 執筆当初は、主人公ジョージ・デイヴィスによる、ロジャー・ハンコックと三人の子供たちの回想録(伝記)という形式をとっていたこと。
- (b) ロジャー・ハンコックがヘミングウェイに近い人物として設定されていること。
- (c) この作品におけるヘミングウェイの目論見が、事実をもとに「物語(story)」を書く過程で生じるフィクション/ノンフィクションの境界線を、意図的に攪乱するということに向けられていること。
- (d) 物語の設定が1936年であること。

これらの特徴から推測できるOMの実験的手法は、ジョージ・デイヴィスを「想起する主体」として物語の内側に置き、彼の語りを通じて、若かりし日の「ヘミングウェイ」と息子たちを描くというものである。つまりヘミングウェイは、自らの自伝(autobiography)を、ジョージ・デイヴィスによるロジャー・ハンコックの(ひいてはヘミングウェイ自身の)伝記(biography)として描こうとしたのである。しかしこの彼の試みは失敗、続くOMでは、ジョージ・デイヴィスを息子たちの父親にし、名前もトマス・ハドソンと変えて、このトマス・ハドソンが自らと息子たちを語るといふ、自伝の基本的なスタイルへと軌道修正した。ところが実際にはOMにおいても、ハドソンの人称(一人称、三人称)の統一を図ることができず、完成には至らなかった。名前や人称の使い分けおよび不統一は、そのままヘミングウェイの新たな自伝創造への希求と挫折を表していると言えるが、メアリーたちの編纂は、こうした彼の

試みを単なるミスとして躊躇することなく末梢してしまったのである。

第5章 『エデンの園』(*The Garden of Eden*, 1986)

本章は『エデンの園』を研究対象にし、2つの側面から考察している。まず5.2では、スクリブナーズの依頼を受けた編集者トム・ジェンクスの編纂方法とその問題点を検証するのに主眼を置いている。これまでジェンクス編纂の問題点はジェンダーやセクシュアリティの観点から積極的に論じられてきたが、本章ではそれを作家ヘミングウェイと編纂者ジェンクスそれぞれの「デイヴィッド(主人公)」像の違いに迫ることによって明らかにしている。

具体的には、ジェンクスが大幅にカットした章や、編纂にまったく組み入れなかった2種類の「仮の最終章(“Provisional Ending”)」¹⁾、さらには、丸ごと削除されてしまった若手作家アンドルーに焦点を当てており、そこから、以下の結論を導いている。

ヘミングウェイが描いた「デイヴィッド」とジェンクスが作り上げた「デイヴィッド」の間には大きな乖離がある。前者の「デイヴィッド」は、特に1つ目の「仮の最終章」において、徐々に現実と作品世界の境目を失い、妻キャサリンともに自己(self)を失くしていく存在として描かれているのに対し、後者の「デイヴィッド」は、愛人マリータの献身的な支えを得て作家としての再出発を強く暗示している。

ジェンクスが完全に削除した若手作家アンドルーにこそ、ヘミングウェイのビジョンの多くが託されている。これは、アンドルーがヘミングウェイとの共通点を多く備えた人物であるだけでなく、一人称で回想録を書き上げることに成功しているためである(2つ目の「仮の最終章」にあたる)。実際、これ以降に書かれた自伝的作品は、フィクション/ノンフィクションともに一人称となっている。

次の5.3では、『エデンの園』の執筆中断時期に書かれたニック・アダムズ物語「最後の良き故郷」(“The Last Good Country,” 1972; 生前未出版)と『エデンの園』の関係を、二作品の共通項「ニック」と「異人種混交」から探っている。ヘミングウェイが若かりし頃に書いたニック・アダムズの異人種間混交の描写は赤裸々であったのに対し、晩年のニック(『エデンの園』のニック・シェルドンと「最後の良き故郷」のニック・アダムズ)の人種/性の逸脱行為が、いずれも擬似的なものとしてしか描かれていないことを指摘、晩年に描かれた「ニック」の特徴を明らかにしている。

第6章 『移動祝祭日』(*A Moveable Feast*, 1964)

本章では、「パリ・スケッチ集」として知られる『移動祝祭日』を研究対象にし、編纂を担当した妻メアリーの編纂方法とその問題点を探っている。1950年代終盤から自殺する直前まで書き続けられた当作品は、ヘミングウェイが作家の修行時代を過ごした1920年代のパリを題材としている。2009年7月に当作品のオリジナル原稿がほぼ未編集の形で出版されたが、それに先立って編纂本とオリジナル原稿の比較・検討を行い、編纂の問題点だけでなく、『移動祝祭日』全体に通底するヘミングウェイの最初の妻ハドリーに向けた愛慕の情の考察にまで踏み込んでいることが、これまでの研究と一線を画す点である。

一般的に、『移動祝祭日』はノンフィクションと分類されるが、本章ではその定義に疑問を

呈している。その根拠として、ヘミングウェイが遺した複数の序文および跋文のオリジナル原稿に、想起される事柄の可変性と操作性、そしてこの作品がフィクションであると繰り返し述べられている点に着目している。そして、これらから垣間見えるのは（想起される）「20年代のヘミングウェイ」というより、むしろ20年代の自身を操ろうとする「50年代のヘミングウェイ」の姿だと主張する。

本章では、メアリー編纂の最たる特徴を、この「50年代のヘミングウェイ」の影つまり、ハドリーに対していまだに抱き続ける愛慕の情、自身に対する強い嫌悪感を巧みに抜き取ったことにあると指摘している。そして、メアリーが行った章の入れ替えや場面・文章のカット、主人公「ヘミングウェイ」を指す人称の揺らぎ（you/I）の統一が、すべてそうした思惑の下に行われたことを証明しようとしている。

まず については、ヘミングウェイは当作品のオリジナル原稿において、「喪失してしまったかつての自分」を“you”で表し、「執筆現在の自分」や「過去から継続している自分」を示す“I”と明確に区別している。そうすることによって彼は、ハドリーと自分だけが共有できる空間を秘密裏に作ろうとしたのである。また についても、現在時制で現れる「作者としてのI（50年代のヘミングウェイ）」が、感情移入を極力排した記憶の操作者・執筆者に限定されており、ハドリーに対していまだ罪悪感を抱く自分（“you”）と巧みに使い分けている。「作者としてのI」に自身の胸中を投影させない背景には、当時のヘミングウェイが抱いていた強い自己嫌悪感がある。

メアリー編纂の舞台裏に関して、申請者は、「パパ」として夫として、さらにはノーベル賞作家として、いっそう健全な「ヘミングウェイ」を仕立てなければならなかった彼女の事情を主張する。だが最晩年を迎え、一人称での執筆に傾倒するヘミングウェイが見せた、「自らをいかに作中に織り込むか」という新たな自伝的作品の創造への希求が、“I”と“you”の使い分けから垣間見えるにもかかわらず、全てIに統一したことは問題であると結論づけている。

第四部 死後に再編纂・再出版された作品における編纂方法とその問題点

第7章 『夜明けの真実』(*True at First Light*, 1999)

本章 7.2 では、ヘミングウェイが1953年から54年にかけて行ったアフリカ・ケニアでのサファリ体験を綴った『夜明けの真実』を研究対象にし、編纂を担当したヘミングウェイの次男パトリック・ヘミングウェイの編纂方法とその問題点を明らかにしている。当作品のオリジナル原稿は1971-72年に、雑誌『スポーツ・イラストレイティッド』（以下『スポーツ』）に三回に分けて部分掲載されているため、『夜明けの真実』は再編纂本ということになる。本章では『夜明けの真実』をオリジナル原稿だけでなく『スポーツ』版とも比較することにより、パトリックの再編纂の意図がむしろ彼自身のフィクション創造への願望にあったことを指摘している。

元々ヘミングウェイがこの作品で展開しようとした作品世界は、journal（狩りの日常やアフリカの描写）の枠の中に、fictionの要素（その中でも二大狩猟として「メアリーのライオン狩り」と「ヘミングウェイのヒョウ狩り」を並列させ、その脇にデッサとの関係を添えるもの）と、reminiscenceの要素（パリ・スペインでの思い出や、過去の間人間関係等）を組み込んだも

のであった。それに対して『スポーツ』の編集者による「アフリカ日記」は、純粹に二大狩獵の一部分だけを並列した journal 一色の構成となっている。デッパに関しては簡単な人物紹介がなされるだけで、その後のヘミングウェイとの接触は完全に削除されている。

一方、パトリックの『夜明けの真実』は、fiction の枠を journal と並列させんばかりにまで押し上げている。具体的には、『スポーツ』が前景化した「ヘミングウェイのヒョウ狩り」の場面を大幅に削除、その一方で、デッパやメアリーが登場する恋愛にまつわる場面は、作品全体を通じてほとんど削除されることなく残している。

上記のような三者間の相違に加え、パトリックが受けたインタビューを考慮に入れると、先に述べた彼の fiction 創造に対する願望が浮き彫りになる。つまり、彼は『スポーツ』が fiction の要素を取り除いて journal 色に徹していることを利用して、父ヘミングウェイの「タフガイ」のイメージやメアリーとの夫婦愛を、編纂という名のテキスト操作を通じて創り上げようとしていたのである。しかしこうした父のイメージは、1950 年代におけるヘミングウェイの実像と大きくかけ離れている。ヘミングウェイが「創作」を通じて、自身のペルソナを発信しようとしたことを、パトリックは「編纂」を通じて行っていると言える。

続く7.3では、ヘミングウェイ自身の創作プロセスに論点を移す。申請者は、当作品の執筆経緯にまつわる重要な点として、サファリを敢行した時期と、執筆開始の時期との間に、その後の人生を大きく左右する事故と出来事が起きたことを挙げている。ひとつはケニア滞在中、二度の飛行機事故で瀕死の重傷を負ったこと、そしてもうひとつはノーベル文学賞を受賞したことである。これはつまり、サファリ滞在時の「ヘミングウェイ」と、当時の自分を傷病に苦しみながら回想するノーベル賞受賞作家としての「ヘミングウェイ」とが大きく乖離していることを示す。そして結果的に、ヘミングウェイが当原稿の中で二つの自己「想起する自己 / 主体」と「想起される自己 / 客体」の均衡を保つことができなかったことを指摘、それが物語の執筆断念に繋がったと結論づけている。

第 8 章 『危険な夏』(*The Dangerous Summer*, 1985)

本章では、ヘミングウェイが 1959 年の春から夏にかけて断行したスペイン闘牛ツアーの様をしたためた『危険な夏』を研究対象にし、生前に雑誌『ライフ』誌に掲載された版(二度の連載；ヘミングウェイは心神喪失状態のため自力で編纂できず、友人 A.E. ホッチナーの助力を得る)と、彼の死後にスクリブナーズ社によって再編纂された版の編纂の特徴を比較し、それぞれの編纂方法とその問題点を検証している。本章では特に、いずれの版にも組み入れられなかったオリジナル原稿の後半 3 分の 1 に着目、そこにヘミングウェイの自己否定・自己喪失が吐露されていることを指摘し、さらに主要登場人物であるアントニオ・オルドネスとルイス・ミゲル・ドミンギンの二大闘牛士にそれぞれ投影された「ヘミングウェイ」の姿を読み取っている。そして、ノンフィクションと定義されることの多い当作品の fictional な面が、他の死後出版作品と同じように「ヘミングウェイによる『ヘミングウェイ』の描き方」にあることを明らかにしている。

『ライフ』誌版の特徴、およびスクリブナーズ社版が『ライフ』誌との差異化を図った点は、以下の通りである。

『ライフ』誌版の特徴

連載の形態に相応しく殊更ドラマティックな要素のみを強調することで読みやすくする一方で、ヘミングウェイが詳しく伝えようとしたスペインでのツアーの全容を掴みづらくさせている。

スクリブナーズ社版が『ライフ』誌との差異化を図った点

- ・ヘミングウェイ文学を形作ってきたかつてのキーワード(「真実を書く」ということ、重傷のトラウマ、冰山理論)を復活させている。
- ・闘牛レポートに限定させず、ヘミングウェイ自身の行動や思い、回想場面にも大きな比重を置いている。

申請者は、『ライフ』誌よりもスクリブナーズ社版の方がより「ヘミングウェイ文学」の範疇に近いとしながらも、いずれの版も死後出版作品群に共通してみられる要素　ヘミングウェイによる『ヘミングウェイ』の描かれ方　を看過していると指摘する。ヘミングウェイが自身について自問・苦悶するのは後半の 3 分の 1 に入ってからで、それを示す重要な人物として二人の闘牛士が規定されているにもかかわらず、両編纂ともその部分を完全にカットしているからである。申請者は、ヘミングウェイが後半 3 分の 1 で主眼においたのは、二人の闘牛士やそのライバル関係ではなくむしろヘミングウェイ自身であったこと、そしてヘミングウェイが新進気鋭の闘牛士であるオルドネスとの一体化によって作家としての立て直しを図ろうとしたことを指摘している。そして、これまでしばしば捉えられてきたオルドネスとドミンギンとの間にある二項対立の構図から、ヘミングウェイの自己派生　ドミンギンには「目を反らし遠ざけたい現在のヘミングウェイ」、オルドネスには「今のヘミングウェイの願望の体現者」　への読み替えの可能性を示した。

おわりに

本論文では、ヘミングウェイの死後に(再)出版された長編小説が、遺稿と異なる点に着目、米国での原稿調査を通じて、編纂者による編纂方法とその問題点を明らかにするとともに、事実と虚構、フィクションとノンフィクションの境界を融解しようとした後年・晩年のヘミングウェイが、どのような「独自の自伝スタイル」を構築しようとしたかを追求した。

編纂方法は多岐に渡り、『移動祝祭日』のように登場人物の名前や人称の揺らぎを統一させるといったものから、『エデンの園』のように元は二つあった三角関係のひとつを完全に削除して全体の約60%をもカットするといったものまであった。だが編纂者や編纂方法は異なっても、彼らが編纂作業の先に見据えていたものには主に三つの共通点があった。1930年代にヘミングウェイ自身が創り上げた「パパ・ヘミングウェイ」というタフガイ・イメージの復活願望、ノーベル賞作家としてのパブリック・イメージの保持、私生活におけるヘミングウェイと妻メアリーの夫婦愛のイメージ強化、である。こうした編纂者の思惑の下、ヘミングウェイの「独自の自伝スタイル」構築に向けた模索は、単に語法的な誤りや老い・傷病による創作能力の低下と判断され、本来「ヘミングウェイのテキスト」であったはずのオリジナル原稿が「編纂者のテキスト」へと書き換えられていったのである。

申請者は、死後出版作品群が生前に出版された作品群と大きく異なることの一つに、ヘミン

グウェイが前者では執筆と断筆を繰り返し、時には複数の作品を並行して書いていたことに着目する。そしてこの背景に、上述した「独自の自伝スタイル」確立に向けての模索と失敗、そして新たに挑戦する姿を読み取っている。彼は自伝的小説と呼ばれる小説や、パリ・スペインの体験記を書くにあたって、過去から現在へと続く自己を通時的に並べるという手法ではなく、複数の自己（過去（若かりし日）の「ヘミングウェイ」と現在（執筆当時）の「ヘミングウェイ」、あるいは大衆向けの「ヘミングウェイ」とそれを嫌悪する「ヘミングウェイ」等）を複数の登場人物に振り分けたり、人称を使い分けるなどして共時的に描こうとした。こうして、大衆に向けては、分かりやすいパブリック・イメージを発信する一方で、それに反発する現在の心情や、執筆当時の自己の姿を、巧みに作中に織り交ぜていこうとしたのである。

結果的に、そのスタイルは確立に至らず、複数の自己を振り分けて描くという手法がもつ複雑さに、晩年のヘミングウェイが音をあげたことは容易に推測できる。しかし、ヘミングウェイの死後出版作品群を伝記的事実と重ね合わせると、そもそも彼がどの「ヘミングウェイ」を公に発信したかったのか、その明確な像を持った上で執筆に臨んでいなかったことも起因しているといえる。死後出版作品群がしばしば事実と虚構が入り混じっていると評されたのも、ヘミングウェイのこうした態度と無関係ではないだろう。登場人物の名前・人称が揺らぐのは、「書く／想起する主体としてのヘミングウェイ」と「描かれる／想起される客体としての『ヘミングウェイ』」との関係が不安定だったからなのだ。作家自身が「描かれる／想起される客体としての『ヘミングウェイ』」を規定できないことに加え、「書く／想起する主体としてのヘミングウェイ」自身も記憶を留めておく能力を徐々に失っていたことを考えれば、ヘミングウェイの「独自の自伝スタイル」の実現は、たとえ自死せず執筆を続けたとしても、やはり不可能だったのではないだろうか。

付章 『誰がために鐘は鳴る』(For Whom the Bell Tolls, 1940)

本論文では、すでに述べたように、死後出版作品群における「書く／想起する主体としてのヘミングウェイ」と「描かれる／想起される客体としての『ヘミングウェイ』」との関係に着目している。自伝あるいは自伝的小説の執筆においては少なくとも、主体と客体とが齟齬をきたさないことが重要である。後年のヘミングウェイは主体と客体の同一化、換言すれば「自己の同一化」を実現するために、客体としての自身の描写方法を模索し続け、自身を複数の登場人物に振り分けて投影したり、一人の登場人物に対して複数の人称を使い分けるなど、さまざまな策を講じたのである。

こうした模索は、死後出版作品群にのみ限られるものではなく、1940年に出版された『誰がために鐘は鳴る』にも見られるものである。本章では、同書におけるスペイン内戦の記憶を再構築する過程に着目し、その中で「自己の同一性」を目指しながらも成就できなかったヘミングウェイの姿を、記憶／記録の操作をキーワードに、歴史小説・伝記・自伝の側面から迫り、晩年の未完の自伝的作品における自己表出の操作の萌芽がすでにこの作品においても示されている点を明らかにしている。

IV. 総評

ヘミングウェイは、ノーベル文学賞を受賞するなど、世界的成功を収めた作家として遍く知られている。だが、膨大な数の未完原稿が彼の死後に発見されたことから明らかなように、ヘミングウェイの晩年は概ね、作品を完成させるための苦闘に終始するものであった。そうして遺された原稿を基に、さまざまな編集者が編纂を行い、ヘミングウェイ作品と銘打って複数の本が出されたのだが、本論文は彼らの編纂方法の問題点をオリジナル原稿と比較しながら批判的に明らかにし、かつ、オリジナル原稿の手書きメモ・修正痕までも考察に付することで、晩年のヘミングウェイの隠された創作意図を推論することを企てたものである。従来にも死後出版作品とオリジナル原稿を比べる先行研究は多くはないが、ここまで徹底した調査に基づく論考は皆無で、まずその点に本論文の意義が認められる。

結果として、本論文が従来のヘミングウェイの死後出版作品研究に、どのような新しい点を付け加えているかに触れると、以下の三点があげられる。

まず第一点目は、死後出版作品をいわばメタフィクション的側面から考察することによって、ヘミングウェイが晩年に目指した新たな自伝スタイルの創造、およびその挫折の軌跡を明らかにした点である。従来の研究では、死後出版作品における名前や人称の揺らぎは作者自身の単純ミスか、加齢や傷病による執筆能力の衰えによるととられ、考察に値しないとされてきた。だが、すでに述べたように本研究では、原稿に遺された修正痕などから、背景に「ヘミングウェイの新たな自伝創造への希求と、その挫折」があることを指摘している。若い頃からヘミングウェイが自伝への関心を明確に示してきたことを顧みれば、この新たな知見が後期ヘミングウェイ研究に与える影響は少なくないといえる。

第二点目は、文献学的価値を備えていることである。オリジナル原稿および編纂本の概要説明や相違点を提示した表／グラフは、申請者が作品論で集中的に議論する章・場面だけでなく、全編にわたっている。いずれも十分な客観性を備えていることから、今後の死後出版作品研究に大きく貢献することが期待される。

第三点目は、新たな自伝形式によりヘミングウェイが同一平面上で共時的に複数の自己を表現しようとしていたことを明示した点である。これまでの死後出版作品研究においては、ヘミングウェイの潜在的同性愛傾向に着目するジェンダー／セクシュアリティ的アプローチのみに偏っていたきらいがあるが、本研究がより多面的な後期ヘミングウェイ像を探究するためのよいきっかけとなるものと考えられる。

以上が、本研究の意義ないし独自性だが、今後の課題ないし問題点としては以下の三点があげられる。

まず、先行研究を取り上げるに際して、申請者本人の批判的立場が十分に打ち出されていないため、網羅的なものに終始しがちとなっている点である。例えば、従来のジェンダー／セクシュアリティの角度からの死後出版作品研究への観点がより明確にされ、かつ、それとのダイナミックな関わりでヘミングウェイが晩年に企図した自伝的品群での自己構築のプロセスが跡付けられていれば、死に至る前のヘミングウェイの内的葛藤を映し出すものとしての自伝執筆にまつわる方法論の模索がより多層的に捉えられたであろう。

第二点目は、編纂者による死後出版作品とそれが依拠したオリジナル原稿のみに焦点があて

られているため、研究対象がやや狭い感じがする点である。全盛期にヘミングウェイ自身が完成し、出版に導いた代表的作品群にも今少し多くのスペースがさかれ、それらの著名な作品群に本研究がいかなる新しい解釈の可能性をもたらしうるかにも触れられていれば、作家ヘミングウェイの全体像の追及においてはるかに有意義な研究になりえたであろう。

第三点目は、ヘミングウェイと同時期に活躍した他のアメリカ人作家たちとの関連性についてである。例えば、フォークナー作品などとの比較のもとに、未完のヘミングウェイ作品における自己構築の特異性が明らかにされていれば、さらに広範囲な文学研究者たちへの学問的刺激になりえたと思われる。

だが、以上にあげた本論文の問題点ないしは課題は、申請者が多大な労力や時間を膨大な遺稿の調査・研究に費やしたことに鑑みれば、ないものねだりともいえる。今後は、本論文を手がかりに、申請者はもとより、他のヘミングウェイ学者たちからも、より幅広い視野や重層的な観点に立つ死後出版作品並びにオリジナル原稿研究が行なわれることを望みたい。

いずれにしろ、従来のヘミングウェイ研究では、死後出版作品に関わる包括的研究がほとんどなされてこなかった中で、全ての死後出版作品とそのオリジナル原稿を研究対象にしつつ、両テキストの差異の指摘にとどまらない本研究は、ヘミングウェイの死後出版作品研究の草分け的存在として位置づけられるべきであろう。

よって、審査員は一致して本論文が博士（学術）の学位に値するものと認める次第である。